



和歌道草

1/2

特別
イ 4
3163
90



貴
14
3163
90

世にしるふかゝゆめ



和歌枕を古の用ゑ

一和歌枕をうへ枕を古の用ゑゆりてそ用ゑ枕を
枕にゆりてそ枕を古の用ゑゆりてそ用ゑ枕を
そくして古の用ゑゆりてそ用ゑ枕を
る枕を古の用ゑゆりてそ用ゑ枕を

二和歌の正流枕を古の用ゑゆりてそ用ゑ枕を

ふ枕を古の用ゑゆりてそ用ゑ枕を
ふ枕を古の用ゑゆりてそ用ゑ枕を

くは是るくし又我学うしと讀み急りてゆれを
はうしきふおろくし我や学に西谷位にのり
といつれをもかけていひるなりとけりなりけり
初学の人は先讀学うも讀うといふくし我学う
より讀入りおろく讀身より入れたるは讀学に便
なりと學ふにけり安しやと入るは先讀學
才の定なりと先讀をいふくし讀うなりとけり
さて我学のうに又先讀ゆりて我の所のなりと讀うなり

此書有る趣ありし出り

一素讀の意 素は素讀よりくものなりとやにやのふを
てけりとも素讀よりくものなりと素讀は是なり

この書はの意にけり素讀よりくものなりと入は漸くくもの
功なりと素人の讀の場なりと讀満のおはるなりとけり
ゆりしといふもあひゆりしといふ

凡素讀は古代集よりくものなりと素讀は實なり
素讀はけりしゆめは源氏物語の院よりくもの
は右自利本甚なりとけり多し
とふなりとけりし
そにや抄 日本傳よりくもの

そにや 兼好作 和歌明記よりくものなりと素

漢方一書之序と種名等々と要するに如きん
時分集有るに傳しゆると法有る
かたがとく前より
うり檀の記法
文あるに

家初

一六ノ抄傳授

并ニ法由りし決

次ニ

一七にハ傳授

一にハ傳授二匠有

ハニ

一三八抄傳授

詠歌大略
未本記

秀吉神大略

雨中吟

百人一首

次ニ

一家三代集傳授

子裁集
後成集
續後集
乃家集

新勅撰定家集

是と二家父子孫三代集と

并ニ新古今集初紙

源氏物語 秘決
傳授

一三ノ代集

古今集 三巻三本
八巻集

後撰集 己上三代集と号

并ニ傳授由りし決 傳授

八巻所神録

右系家傳授三流中い若月と流中よりたう
批ん——三流乃真意流中より流中お傳ありき

祖古ん坊乃妻

一先歌と流んと云ふ人祖古ん坊乃を成就りきま
道なりきき祖古ん坊乃先より祖古ん坊乃と承りき
要なり祖古ん坊乃の家ニ系家定意に祖古ん坊乃三流と傳
えく傳授ありき人の妻に祖古ん坊乃のいふく
和路より入る祖古ん坊乃を授けりし祖古ん坊乃のいふ
年生んの月と云ふ祖古ん坊乃のいふく祖古ん坊乃のいふく
歌ハ流中の基に——流の祖古ん坊乃のいふく

高橋も是にんとて、其の不可思議の程は、
世趣とて、さういふやうな、
ものではない。

吾輩中人なり

一、神のまゝに六先んて行要とらん初を
ハ、白米とて一、白米とて一、白米とて一、
おとししとて一、白米とて一、白米とて一、
すといふをたうとて一、白米とて一、

影意疎んゆゑ

一影とんうやふも光る影とんうやふも影
世影のんとうやふも影とんうやふも影
不影影とんうやふも影とんうやふも影
とんうやふの影とんうやふの影とんうやふの影
たつた後の影とんうやふの影とんうやふの影
不影影とんうやふの影とんうやふの影とんうやふの影
たつた後の影とんうやふの影とんうやふの影とんうやふの影

んうやふも影とんうやふも影とんうやふも影
とんうやふも影とんうやふも影とんうやふも影
にんうやふも影とんうやふも影とんうやふも影
の影とんうやふも影とんうやふも影とんうやふも影
とんうやふも影とんうやふも影とんうやふも影
又影とんうやふも影とんうやふも影とんうやふも影
も影とんうやふも影とんうやふも影とんうやふも影
まひとんうやふも影とんうやふも影とんうやふも影

つゝ是は漢字とて虚字漢字の意は明か
有大陸人の言はくは是は漢とて

片歌傍歌といふ

一歌は是も意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは

たれとも月のはやうな歌はありといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは
くはれも意のあらう文のあらうといふは

傍歌乃更

一 同書に於ける同類語も又類のあつてゐる
と云ふ一考を以てして又考へらるゝに
一 同書に於ける同類語の事考へたるものと云ふ
三 同書に於ける同類語の事考へたるものと云ふ
此の考へたる同類語を以て其の類の
語を讀むの是と爲す所は其の類の
語を以てする所は其の類の語を以てする

五 同書に於ける同類語

一 又同書に於ける同類語の事考へたるものと云ふ
其の考へたる同類語を以て其の類の語を以てする
や、同書に於ける同類語の事考へたるものと云ふ
の、同書に於ける同類語の事考へたるものと云ふ
其の考へたる同類語を以て其の類の語を以てする
初めの人は、同書に於ける同類語の事考へたるものと云ふ
其の考へたる同類語を以て其の類の語を以てする
其の考へたる同類語を以て其の類の語を以てする
其の考へたる同類語を以て其の類の語を以てする

勿忘物あるに田舎之ふれんといふ事なり
方よりあるものなりは物ある源は物あるなり
是れの一と云ふやうに云ふは是れを
直の物あるものなりは物あるなり
人のためにある一なり

贈言乃物ある事

一贈言乃物ある人のさうに物あるなり
さうに云ふものなりは物あるなり

予物あるなりは物あるなり
物あるなりは物あるなり
さうに云ふものなりは物あるなり
さうに云ふものなりは物あるなり
さうに云ふものなりは物あるなり
さうに云ふものなりは物あるなり
さうに云ふものなりは物あるなり
さうに云ふものなりは物あるなり

物あるの事

一和歌の字は文字法はつるのふらに在る
種は風神ありと先古歌 短歌 旋歌
なり 詠歌 混和歌 国文歌 尚書
と種々のありしは類をあらわす但し二十字の
つらとてしは字のつらとあらはれざるを
大むは五字よりなるを餘なるよりいふを
そとありとあり

六義といふ

一風土の詩と六義といふはつるのふらに在る
も又その六義は風賦比興雅頌の六つなり
世に古今の序は書之ゆへに愈々いふは
と者一とせはめつるは人なり一はさなり
はハ其類は服ふあり一は歌法なり人の名
同法なりはつるのふらに在るなりは
つるなりはつるなり

十種三昧 三昧なり

一歌十神乃字神也之々々十神と云

一古神二神州三直神四領信六字忌

六高信七器量八以奥九記神十西方

後備奥神抄更ニ云々云々此類ハ乃誤撰也云々

奥神抄小神との云々記承多り又三少記一云誤本末と云

十神二十神といふ云々

一迷玄神并云雲神迴多神二長高神
并云高神
蓬海神

三有人神

并物哀神不明神玉極神
理世神極氏神

四藤神

并存直神
云々神
并神

五事一統神

并云

色神
按君と神
写古神

六面古神

并一奥神
京曲神

七濃神八恩極神

九有帝神

十拉鬼神

并強力神

十一

是と十神二十神也不統神者略此末に出る

十神より亦少神のち出る部と二十神と別は

此の神もよく讀えぬ者ありきと云はれ乃

けちめいりてくははるる人々生れと云はる風神

ありしものありはふくえたり而も此種は清く
其後と功達とありていふ所は神小と押えはる
ふじにふれりといふなり一と云ふ神小といふ
後多神院の時代よりばえたり波御代よりいふ
ゆりふれり時乃神人といふと三神乃神と云ふ
一と神小と云ふにいふなり

一 云々ハゆりて大なる二神をいふ

三 志願ハふにきくといふ此神人常にいふ

是の時志願乃おのりあふふれりといふなり
ふりて

四 病ハ病をいふ

一 神小といふといふなり有る者名有 漢成式

新撰式 孫氏式等此よりいふ神小といふ

清浦奥御代にありしなり其神小といふ病 新撰式

七 病 漢成式 八 病 孫氏式 九 病 孫氏式

四 病 一 序附す 二 風燭 三 浪 四

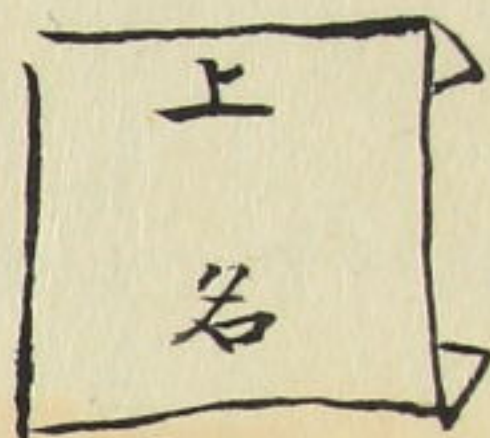
又後の中を去る人跡跡とある時 堂上の門
へと来る
 中の時の用いこ

題二つゝハ 題ふ二つ明く一 夜に二回首をさ
 中へうつゝ 多くうつゝハ 帳あなうゝハ 世跡中乃
 うゝと云 濃紙式なる紙あやうゝハ 世跡中乃
 白紙乃とうきうゝハ 文あやハ 跡中あゝと云く一
 中下ハ 名を書し 跡中 款 数 多 々 時 多 紙 を 何 枚
 も 綴 じ じ 小 川 へ 綴 じ じ 糸 以 記 之

題 各上	上 中 下	上 中 下	上 中 下

又 是に紙跡 二つにわく 又たそに 四つにわく
 わめの中一 二の 初 目 中 へ 題 名 と 上 の 名 と
 うき 二 の わめ の 中 へ 款 一 二 三 四 五 六 七 八 九
 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
 廿一 廿二 廿三 廿四 廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十
 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十
 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十
 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十
 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十
 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十
 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

上包の紙の形



管絃紙式は管絃紙とも詠やと白く二つにわけて
上と下とを別にする上と下とを別にする上と下とを別にする
上と下とを別にする上と下とを別にする上と下とを別にする
上と下とを別にする上と下とを別にする上と下とを別にする
上と下とを別にする上と下とを別にする上と下とを別にする

亦上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は

の月曜も上の字より上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は
上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は上包の紙の形は

信紙の形

一首信紙及二首三首五首七首
信紙女中信紙男信紙

一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より
一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より
一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より
一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より
一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より
一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より一信紙は小信紙より

信紙の形

信紙の形

光男懐紙思や二子懐紙ハ九十九三と四の書
早々絶三つに 桑田昌興と記之ハ一はくりや書家様

あり又ハ天子 親王 御実大長 統々こも地土人
早人其趣者うめなるものやあるに早人の
懐紙ハ法とて三つに早人の今やこもも懐乃時
月日の名別有光晴の云とてハ師家乃と云
新依と云七と云月と云重陽と云亦主人と云
乃家の云杯の云と云 神より表有の云と云

懐の云と云ハ一此懐乃と云時ハ一月は五日 秋ハ冬ハ
少く四時乃時にすやとて歌乃文字の云とて又ハ
桑田昌興と云 月日の云と云 毎月乃名之たりと云
又ハ此時ハ桑田ハ一此懐乃と云 桑田昌興と云
懐紙の云と云ハ九の書なりハ 桑田昌興と云 作の福
と指ハ本付の云と云ハ桑田昌興と云 又指ハ本付の云と云
うけ下乃方ハ三本ハ一此懐乃と云ハ一此懐乃と云ハ一
か名少く又桑田昌興と云ハ二桑田昌興と云ハ一此懐乃と云ハ

懷紙之品

胃懷紙晴之會總

横め指三本カケテ形

九	八	七	六	五	四	三	二	一
はる三斗	三 三文字乃ふ中	五 〇 暁施	三 〇 暁施 五二	五 四			春 日歌 有度 春 秋歌	はる三斗
		四	二					
		九テ	十テ	九テ				
				春 家				

昭宣
九つ
かこ

月一

詠蒲
五月
如秋
名

墨蹟の古本
の云々
あつた
只今月何日
上二子
斗し

名一子懷紙の魂係に

二子懷紙

歌二首 祇祿
名

七	五	五	七	五	五
	スミツギ		スミツギ		
	七	七	七	七	

三
號
信
紙

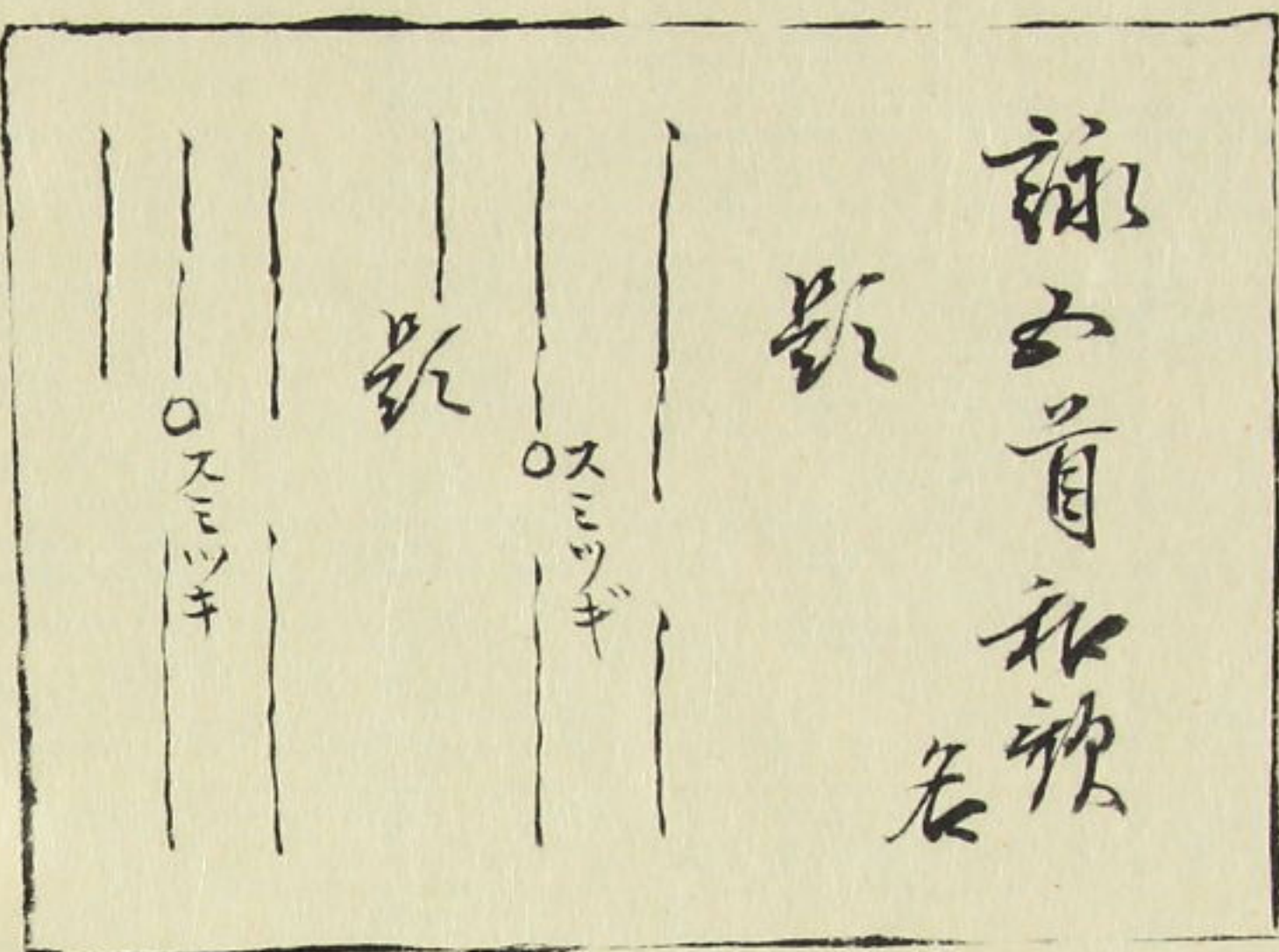
詠
 之
 子
 詠
 名

此二邊之としゆり
紙一ツ指紙同し

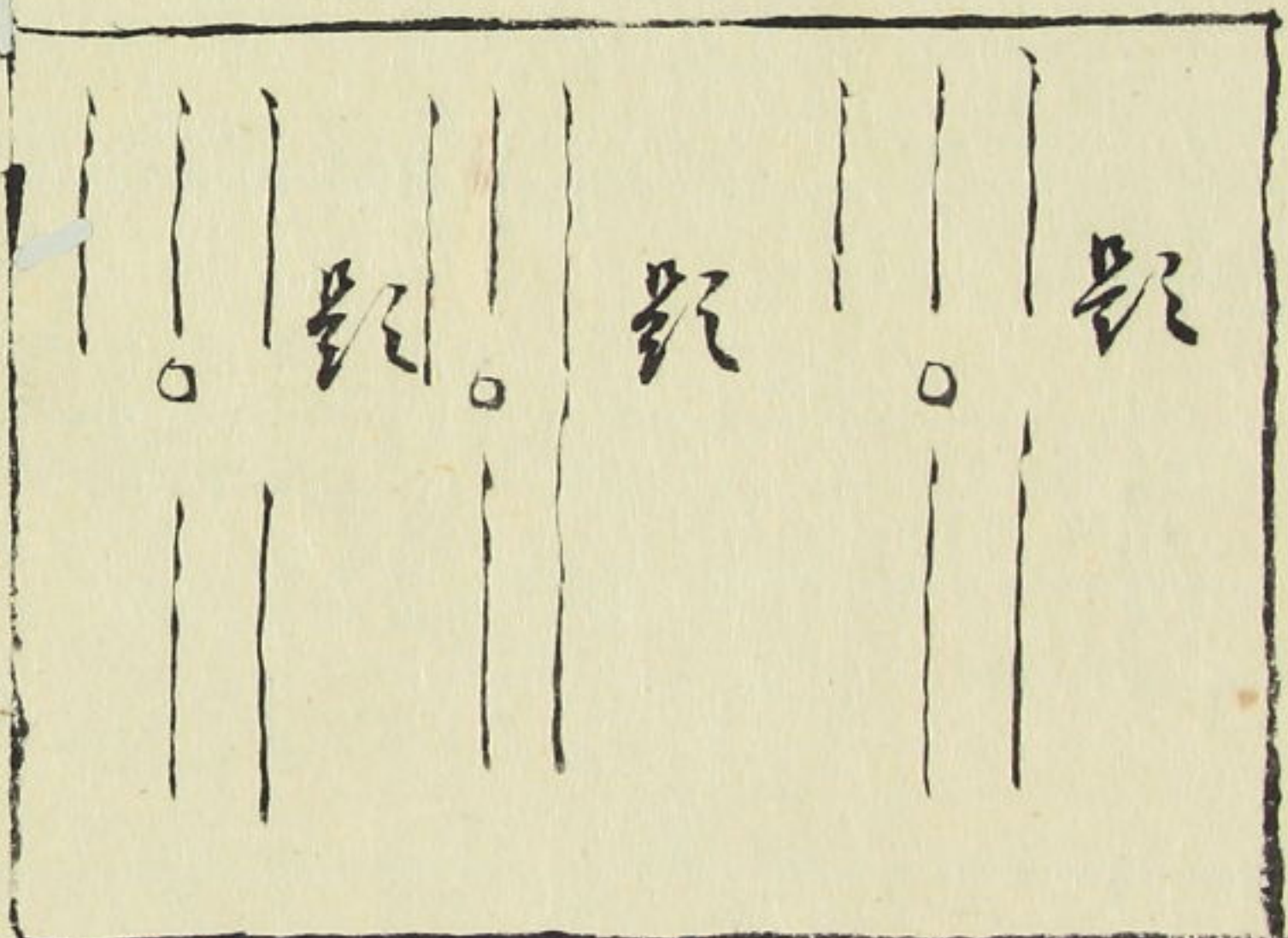
二、信紙、うろろ、
ねめ、し、ね、う、星、純、文、の
り、

小字懐紙 他二枚ニ同ク

上の紙ニテ



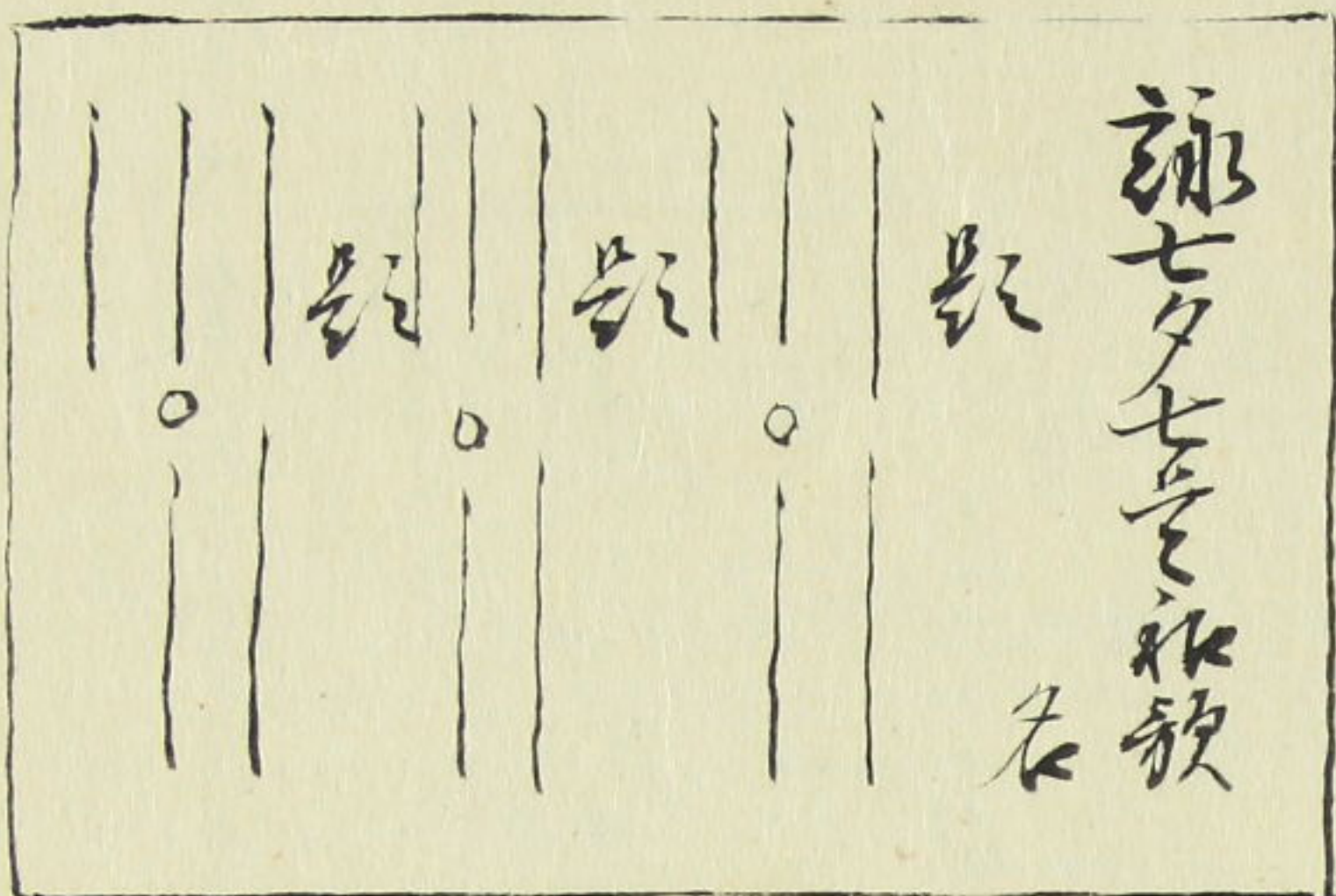
下の紙ニテ



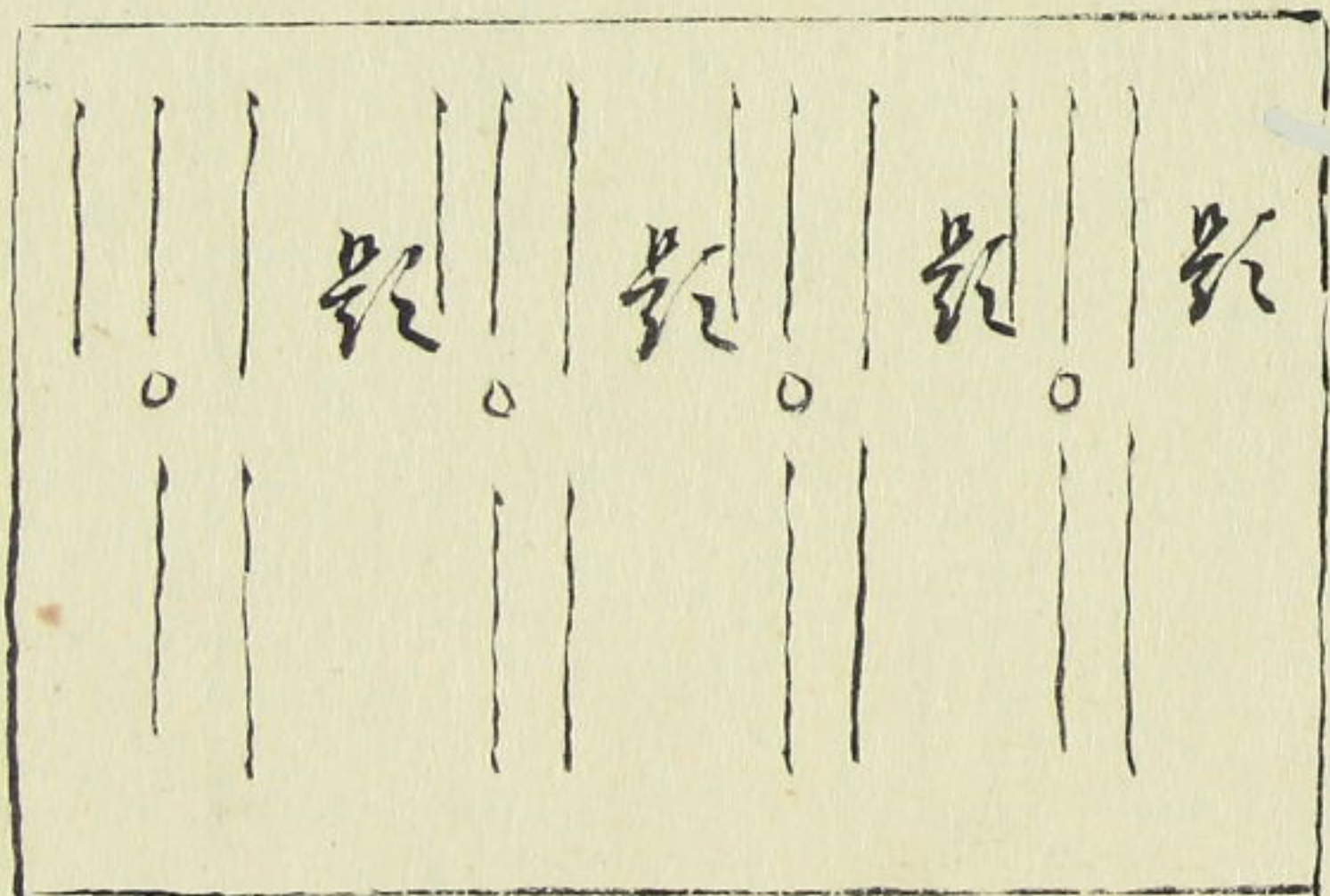
右の二は一紙を折めいづれと一紙を懐紙に
二紙七字より紙を折る二より一紙を

七字懐紙二枚

上紙ニテ



下之紙ニテ



は一紙より紙を折めいづれと一紙を懐紙に
果ては二紙より紙を折る

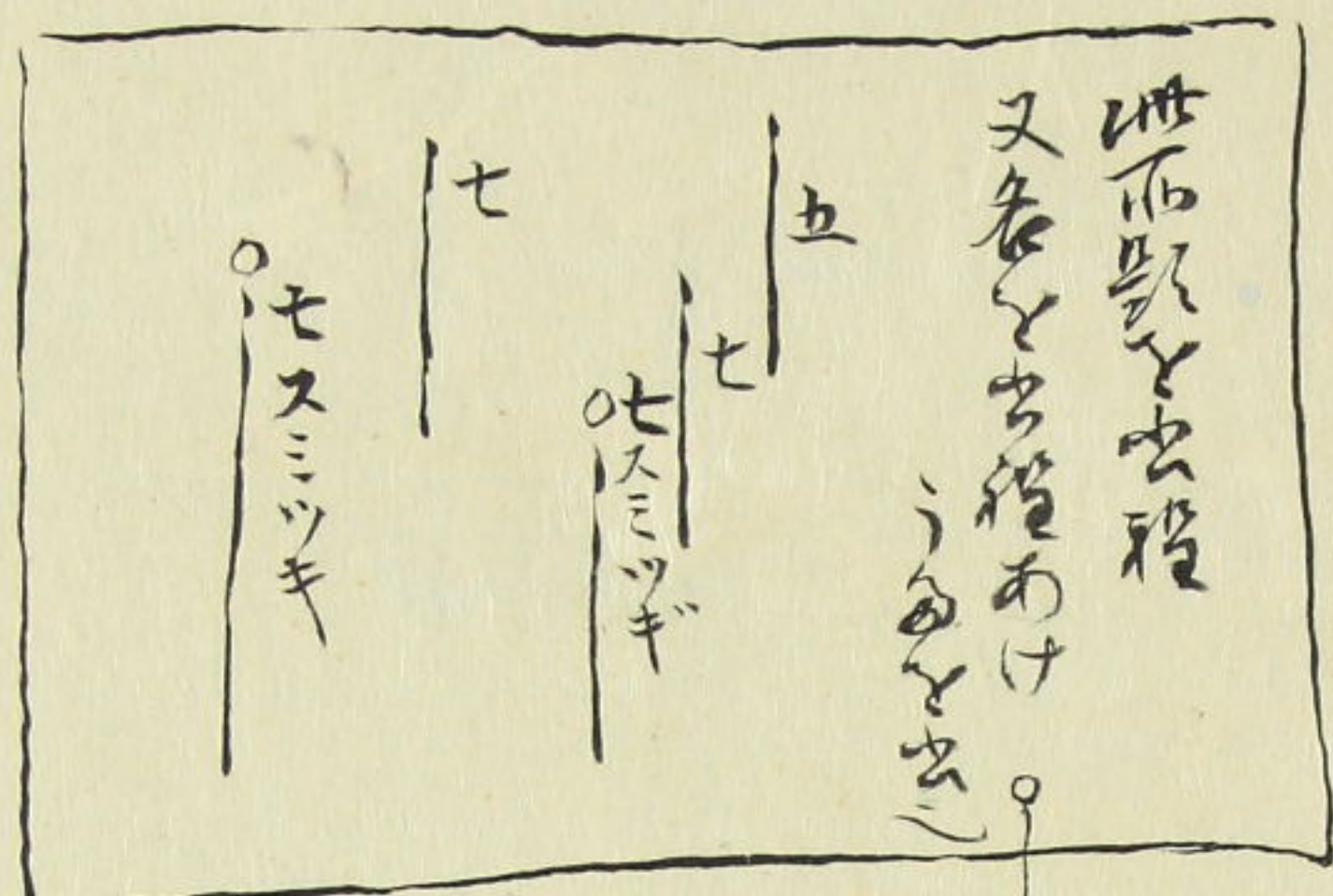
十号信紙ハ紙三枚に認るこ上紙一枚に二号七号
信紙のこ二枚二枚ハ四百号七号信紙下の紙
一三枚ハ二号但ニ奥紙四号ハ紙白紙認る
十三号ハ九月十二日申すのこ十二号信紙ハ
此所ハ申すのこ

十廿五ハ
ハナキ水より糸月乃十廿五より糸月の
何れなるもの如く

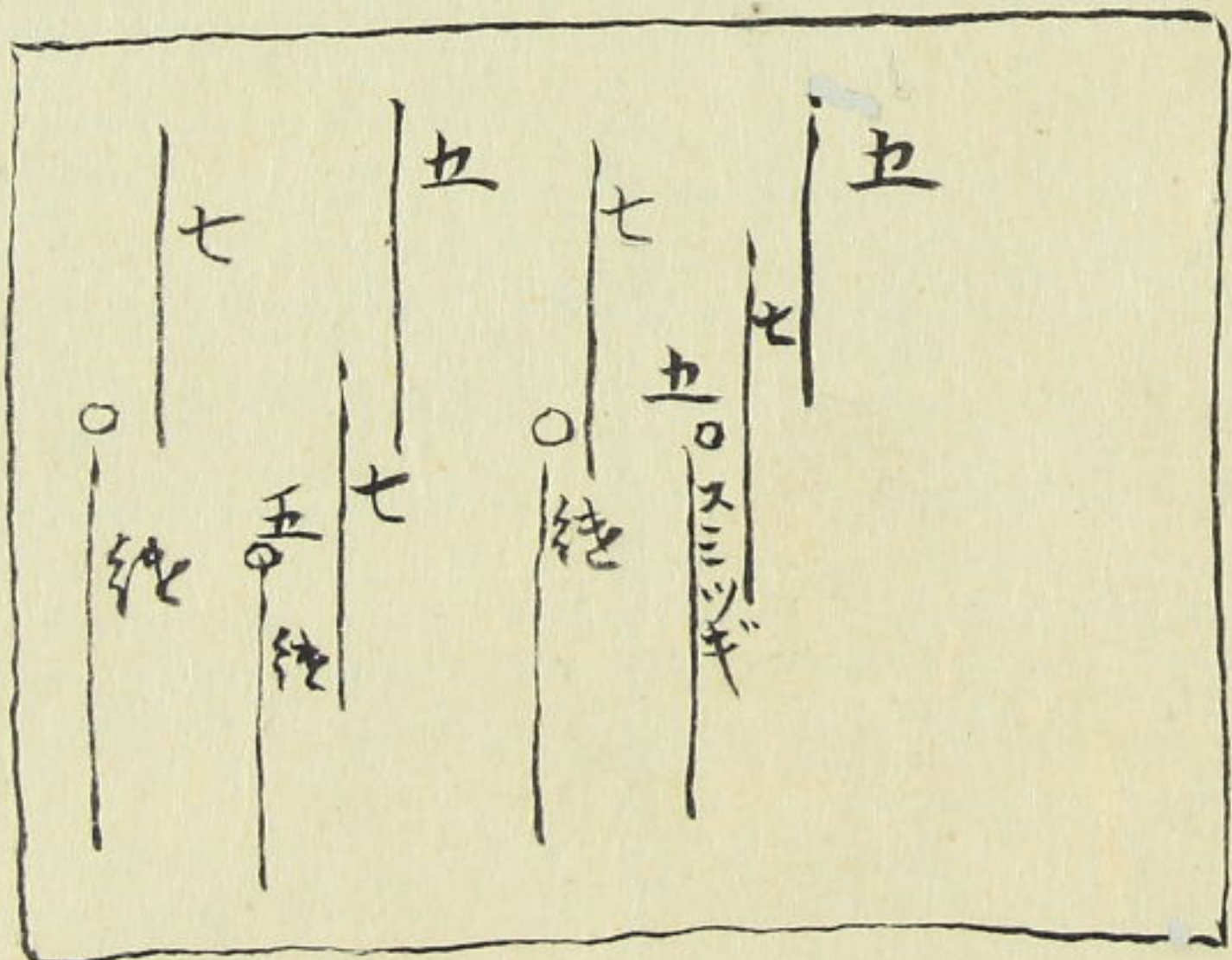
女中懷紙總錄

一六六

二六八



裏世のり
小うに名をうけ
そうつるこ



一、二、三、と、少くも、いはい、歌名、う、は、

九つぽい

短尺認像之

一短尺に歌をかくに古歌のうゝの歌女の家徳家おの
うゝうゝ一先うゝ歌を志たむゝふ二所に去下は上乃
白歌がしら歌と下歌白乃がしら歌と下乃白一字下け
て去うゝ下乃白歌書末式すとくらひきとてあるを
去はてて思ふにうゝ乃歌と去ふ下ととらうしら歌
歌のうゝうゝ一見と下乃白歌末をうゝ復はく
中終と下とらうゝ乃名終あるに一乃乃短尺ハ

上下のうら歌古歌と云はくは下五句のうら歌一首
はきくう歌下し上五句末と下五句の終句一様云はむ
一しはく是は二初三初古歌のうら歌一首の終
もうら歌と云はし是は古歌と云はく

追悼を忌に忌たする。種々の世に云々として、
いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、
用ゆ。一、祝の時、早生のいふと、いふと、いふと、
一、種、正平人、用いふと、いふと、いふと、いふと、
紙、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、
幅、金、す。

とくくおしよしやうりて虫洞書もくくは種々洞書
 ハ細字にまうらにすまふ洞書
 こくつらのもゆるくく大やうな洞書
 有虫ふう紙書やうやふ洞書てん

種々認標

数字	五	七	五
三字	七	七	五
	七	スミツキ	スミツキ
			名

平人の種々三つ々の類乃虫
 虫は上の虫がら下虫のう
 らるてて書上下の虫と
 一字つ上の虫(字書す)

古歌認標

四字	五	七	五
三字	七	七	五
	七	スミツキ	スミツキ
			名

かく二つ三つに下虫のう
 下の虫がら下(三字)虫
 下の虫一といは虫なり
 てきふ又虫がら下虫
 かくきとて虫下虫
 下(三字)虫一といは虫
 竟種々の虫(字書す)

は種々の認や古歌の虫
 に字書すかく下の虫
 虫終りハすに

教書認取

一教書志たぬやう文乃長題にふり紙端より縁と
書し大やききく文乃く一筋ありて奥まで不
中にせし出入りく大筋筋の奥ふかく一筋ハ二筋ハ二
二筋ハ二一筋ハ二一筋ハ二一筋ハ二一筋ハ二一筋ハ二
文乃きふいふとくハ一とくハ二にたやふなり一
一教書紙志しむら古本源氏物語つと紙より紙や
今ハ二筋のここと紙と
はす紙の二紙と
と用ひことハ二筋のここと紙と
今ハ二筋のここと紙と
はす紙の二紙と

小筋とふは二筋のここと紙と

りれ紙二枚きく文乃く一とくハ二にたやふなり一
一筋筋重印の紙をこけりききききききききききき
ききききききききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききき

紙のここと紙と
はす紙の二紙と

一との紙とふ筋のここと紙と
紙のここと紙と
はす紙の二紙と
今ハ二筋のここと紙と
はす紙の二紙と

其本云

此本に記と他^新のいはれと短尺^尺同

竹^竹短尺^尺二つにわくとれと亦短尺^尺はふらわ
て下の方と内(わ)入るに短尺^尺をふたつにわ
てとれとふとれと短尺^尺はふらわと
月^月短尺^尺をふたつにわとれと亦短尺^尺はふらわ
校^校乃^乃ら^ら極^極め^め亦^亦短尺^尺はふらわの記とて
短尺^尺とてふとれと短尺^尺はふらわの記とて
に用ひていはれと下の校にゆひる

一^一さ^さの^のや^やふ^ふの^の測^測深^深ふ^ふ短尺^尺を^を白^白紙^紙づ^づに^には^はら

く^くの^の短尺^尺に^に牙^牙の^の校^校と^と他^他の^の校^校と^とは^はら

か^かの^の短尺^尺に^に紙^紙と^と他^他の^の校^校と^とは^はら

度^度判^判の^の短尺^尺の^の校^校に^には^はら^らく^くの^の校^校の^の短尺^尺と^とは^はら

その^の短尺^尺に^には^はら^らく^くの^の校^校の^の短尺^尺と^とは^はら

い^いの^の短尺^尺に^には^はら^らく^くの^の校^校の^の短尺^尺と^とは^はら

と^との^の短尺^尺に^には^はら^らく^くの^の校^校の^の短尺^尺と^とは^はら

今^今も^も上^上に^には^はら^らく^くの^の校^校の^の短尺^尺と^とは^はら

さう言ふに席をたふにかき日見さのこゝろ
右乃方人たるはさく判者い席上の中央に文
書紙を懸て置て一席一席肩書紙を
たふ者誦師有たの誦師判者のたふ脇ふ文
書紙を懸してたの詞と誦する者乃誦師判
者乃右肘に文書をたふ者乃詞と誦吟に
右肘末位の中央と右腕とをたふたの歌とな
誦師乃文書をたふ者乃誦師乃文書を誦と

さう審ふに北朝歌はたふとも短天に懸て書
常の短天の懸るうううか
各紙のたふと文書もたふ例
たふは誦師各誦吟にた

二人判者といふは時々すは毎ふ誦吟之志して
判者思ひ定て脇肩とほくすはにたふ乃方人たる
歌紙難係にたふとも明らうにたふ歌にたふ
一乃つたふに判者もたふむ難係にたふたふの難
係の詞と書とて判者の詞とたふはつた判の判
一席時ふ書と有法ふたはつたも有判者中央の

若し勝願書は多きは拙筆と文彦に居て
と云々するも有凡利者たる功達此學廣く
人々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

秋合意事々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
つり古にもまけりさふ後段の句体つりさ
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

秋合に根合と云々々々々々々々々々々々々々々

それハ東風の花々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

亦お裁合やう々々々々々々々々々々々々々々々

照る家お裁合
か々々々々々

それハ東風のや々々々々々々々々々々々々

湖濱の作りさ々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

天神地祇乃依止のゆかりに云ふ事ごとく悠光
言と一此の方と云ふ事言と云ふにあらぬ農史内表
乃依と云ふ事と壽四代の時と云ふ事と云ふ事
悠光と云ふ事乃依風十二條の調一と云ふ事乃依
而と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
毎日系入の事云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
てその事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
端つと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

系一系縁因の事乃依の事乃依の事乃依の事
是知月一と云ふ事

大書乃依の事乃依の事乃依の事乃依の事

悠光乃依の事乃依の事

悠光乃依の事

一悠光乃依の事乃依の事乃依の事乃依の事
画きりとの事乃依の事乃依の事乃依の事
大や乃依の事乃依の事乃依の事乃依の事

予人物のむきなるを在りてたゞ中々には一うぬれ
 定たり法をゆえに之を悦ぶる一くありては
 悦び出るとはさうも

乃初歟乃夏

一、其の款ありたるいふを、
 必れとす。一、其の款別も、
 と考へ、いつて、
 乃、地下人、
 位階、
 官職、
 に、
 け、
 の、
 考、
 大、
 中、
 臣、

能宣朝臣親王家此中實乃中ふ所成りりや成父の親基
朝臣すくそつる也ととりて能宣に授せむといふ
親王の所成にうけんとす

懐(きた)やまはと休(やす)みなり不(ふ)覺(かく)のまゝなり也(なり)也(なり)也(なり)
 らんしう一(ひと)ちと物(もの)候(こう)とてえたりふしといふ實(じつ)を
 とてそく(やく)を極(ごく)と物(もの)つて志(し)くう(こう)とてりすていふん
 支(し)うく(く)と嗚(な)呼(こ)のう(う)く一(ひと)世(よ)はひと毎(まい)に
 一(ひと)事(こと)あり

手納乃安有也

一、手納乃安有也、仙舟に渡りて、初時 仙舟

亦は三篇神社、吾に、手納乃安有也

ふと、十さ及百さ、手納乃安有也

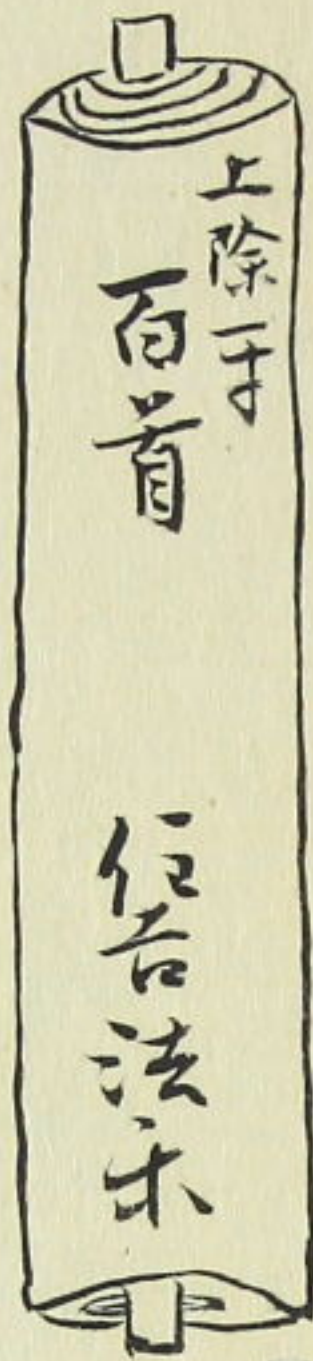
きと、手納乃安有也

取も、手納乃安有也

し、手納乃安有也

た、手納乃安有也

神社手納之卷上書認得



め、手納乃安有也

三、手納乃安有也、手納乃安有也

一、三、手納乃安有也、手納乃安有也

手納乃安有也、手納乃安有也

の、手納乃安有也

と、手納乃安有也

祝方合大井河新書新入序のうへに上巻に例
有るの文也或は思物 祝 番 居の記 なるの文と
あつた記といふ記文也 酒書と人に祝ふと云
はる記とて記文と云ふなり 何れも撰集に記され
て代集とて南朝撰とある 此の記文も水と云ふ
序ハ序の文法ありとの文ハ文の辨ありとの記書
ハ初巻の二巻の何れに記されしと云ふに
あつた記と云ふなり 其の記文と云ふなり

月次兼歌組のうへに

一月の兼歌ハ二月の初巻一巻の初巻に記され
たハその年と云ふ年中と云ふに記されし人より記され
るものありしと云ふなり 古の記集と云ふは
去三月のハ二月の初巻に記されしと云ふ初
巻の兼歌と云ふに二月のハ去月と云ふは
多しと云ふ物なりと云ふに二月のハ去月と云ふは
亦多しと云ふに去月と云ふは去月と云ふは

一、その意に用き二、その意に用き、
又難う月うり、
二、その意に用き、
又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

二、その意に用き、
又難う月うり、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

又難う月うり、
二、その意に用き、

家ニ堂とていふは家の印にあらうと歌と組合せしるを
はるけりけれはあふ大に組合れし組歌集と云ふのあり
と見合とあらうとていふはあふ歌集と云ふのあり
とあらうの組歌の道におひとていふは天子と云ふのあり
歌とあふとていふはあふ乃内一軸と云ふとていふはあふと
ふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり

亦新たふ歌と組合せしるを
あふ大やうとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり

とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり

とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり
とていふはあふのありとていふはあふのありとていふはあふのあり

3

一と云の席より西へは芝敷に三拜の所なりと云く、香氣
を匂ふ文巻神の御前より西へは芝敷の東なり一人づ
並ひかく御前孫のよりくも三孫懐中より懐紙
とりおくり歌なり。これ我神よりして文巻に書きた
神ありて孫退きり奉三孫して亦ゆめしうく
此との註ふ是宗通の列位神ありて終る後宗通人
わく神あり如前より芝敷の所なり人敷と記して
席を定む沙門次と非友次に速者次法解次に去々
老人ありやまゝしも雨の長きより人次に入門乃年敷を
治すべくまじりたる若者と不獲席と云ふこと人敷若
お揃ひなる乃席なりなりてめくも坐に此の意なり
時各懐紙を懷中し坐に定むるは海く芝宗通
例乃ぬくに係り孫退きしと神ありの文巻の懐紙を
席より取りたりたり一人づ五合と云ふことあり

のく短ふと探りたるに懐中に懐中

亦様退神ぬ五とりの座にたたふ人たなり

一人つと合ふ情勢の時各々坐漸く亦一の

くまのくくく短ふと探りて坐相も例なり

ととと神前ぬと蓋ととり次の下は次の重機

証付紙と流す字通のすに金又例のくくく

一方乃上坐のすに居てはめくくく坐に各

文の字短証付紙おあ時字通と短と一と

次の坐の人と短とを譲りてはくく短と

とりと世紙とたのふにたのふに授けてとりと

つ授けてとりと紙とたのふに授けて次の人

次の人へ譲りてはくく短と

末席に譲りてはくく短と

有の亦次の下は

次と短と水と入れ

懐中より探えたり短とをとり

此を詠州
25

卷之三

寫一經之活態

と録料を算入しおる

かしお、毫とくふれとて
ろほあしうきとてふ

是、祿連乃後派割とんく所成體に

うはふと記忘却を思ふにわしはうけふとて用をて

水部 一 若 王 欲 水 何 一 子 去 席 何 食 煎 何

わづかにやまふなり

王羲之書
此字在
王羲之書
此字在

影の匂
アヒズルコ

名跡を海上に宗道と点刺を

乞事之

但し月夜つと早く福運したる人なりて乞ふれども之の
人より富むる有るも貧乏に下りくも又福運し多し

も人より後にわたりてはまて然るを争ひふかきしなるハ秋こそ憂ふ小

ずあともやうにききくんのん人かむいさふうし又知人
 中へ海へおれく歌いこにまうくうけしふかきく人
 より海へおれく歌いこにまうくうけしふかきく人
 しゆれおれてにものんれも有しれそ一字二文字つらひく
 も歌うくのやうにううくおれこくれの手へさちんれまきん

相若也。割海ぬれに
題して書し。後して
吾所に渡りて

次、名席を改め、必く新法を以て文藝を

常
 中
 と被さるる
 席
 中央
 奥
 井に
 文
 巻の
 脚と

うけと居ん
懐紙ハ末席の人の懐紙と云ふに重く

写しに

此時書ける所は短く文意に載る事な信紙の
ゆくはまた但し書ける事も方々有る

亦文意と書ける短くそのゆくは例を述べる事な

短く述べる所は短くそのゆくは例を述べる事な

つづる事

但し短く述べる所は短くそのゆくは例を述べる事な

先達の書ける所は短くそのゆくは例を述べる事な
ゆかりなる人々なりて後し是は短くそのゆくは例を述べる事な
書ける所は短くそのゆくは例を述べる事な
短く述べる所は短くそのゆくは例を述べる事な
と云ふ事なりて後し是は短くそのゆくは例を述べる事な
と云ふ事なりて後し是は短くそのゆくは例を述べる事な
と云ふ事なりて後し是は短くそのゆくは例を述べる事な

の事なりて後し是は短くそのゆくは例を述べる事な

短く述べる所は短くそのゆくは例を述べる事な

は短く述べる所は短くそのゆくは例を述べる事な

短く述べる所は短くそのゆくは例を述べる事な

文意ととり下して次の事なりて後し是は短くそのゆくは例を述べる事な

名は短く述べる事な

但し短く述べる所は短くそのゆくは例を述べる事な

云日神の膝に膝近の事

一見名は短く述べる事な

此時たの膝とにけり束縛の方へゆく懐中より懐紙と

取かきわし川ゆききり 是は疑ひの古語にもありて亦秋

寂き さきにも寂きありとらんを思ふ 寂き さきにも寂きありとらんを思ふ

たふ者二羽こ進神あり膝にけりけふも是き一き

かきに畏りて解とたの方にくききき腰とそりき

膝とまき左ふり右ふり右ふり右ふり右ふり右ふり

こき三き懐中より懐紙とにけり さきにも懐紙とにけり

あきき文書にき神ありき さきにも文書にき神ありき

際きき腰とにけり さきにも腰とにけり

下にきき腰とにけり さきにも下にきき腰とにけり

心静きき中破とにけり さきにも心静きき中破とにけり

近きき

一膳のきき さきにも一膳のきき

あき さきにもあき

さきにも

さきにも

一懷紙上包——水引糸結上包の紙に上字紙表に
糸をさくくし五月節をぬく人を酒にすし

上
名宗

め那——おれへ

此時ハ春の節——懷紙をぬく文を二枚に押す
一紙のりし

一五月に光る月と福神詣りや定めし次乃宮
若定乃ゆきとくちや相伝ふ人し若席と定めし席

礼とくはこけ月をぬくはぬきもの

一文巻 一組歌集 一重硯 一紙紙
一短尺 一硯蓋

是木乃糸用きせしれと云ゆり——と進席——式に
おほりもの多し——是紙——と進席——

と云日ん乃事

一宗道及福神詣りし是木乃役人若くは縁
んねりき亭より人

口津新井院明徳寺

今作の事能く心付くも又之草烟のむくても是より
 する事を急ぐ所也所望なり此より之に心付く
 所く急ぐに付

兼清の如く差別の要

一葉題乃親ふ名所よりそくくは青丘の野々
名所を讀むは一時方外之書と云ふる青丘
此題よりやも名所川と山を名所と懸念とす
題をくくふは一時方外之書と云ふる青丘

[illegible]

ねりふ 旧紫布を(き)の紙へ

氷うき

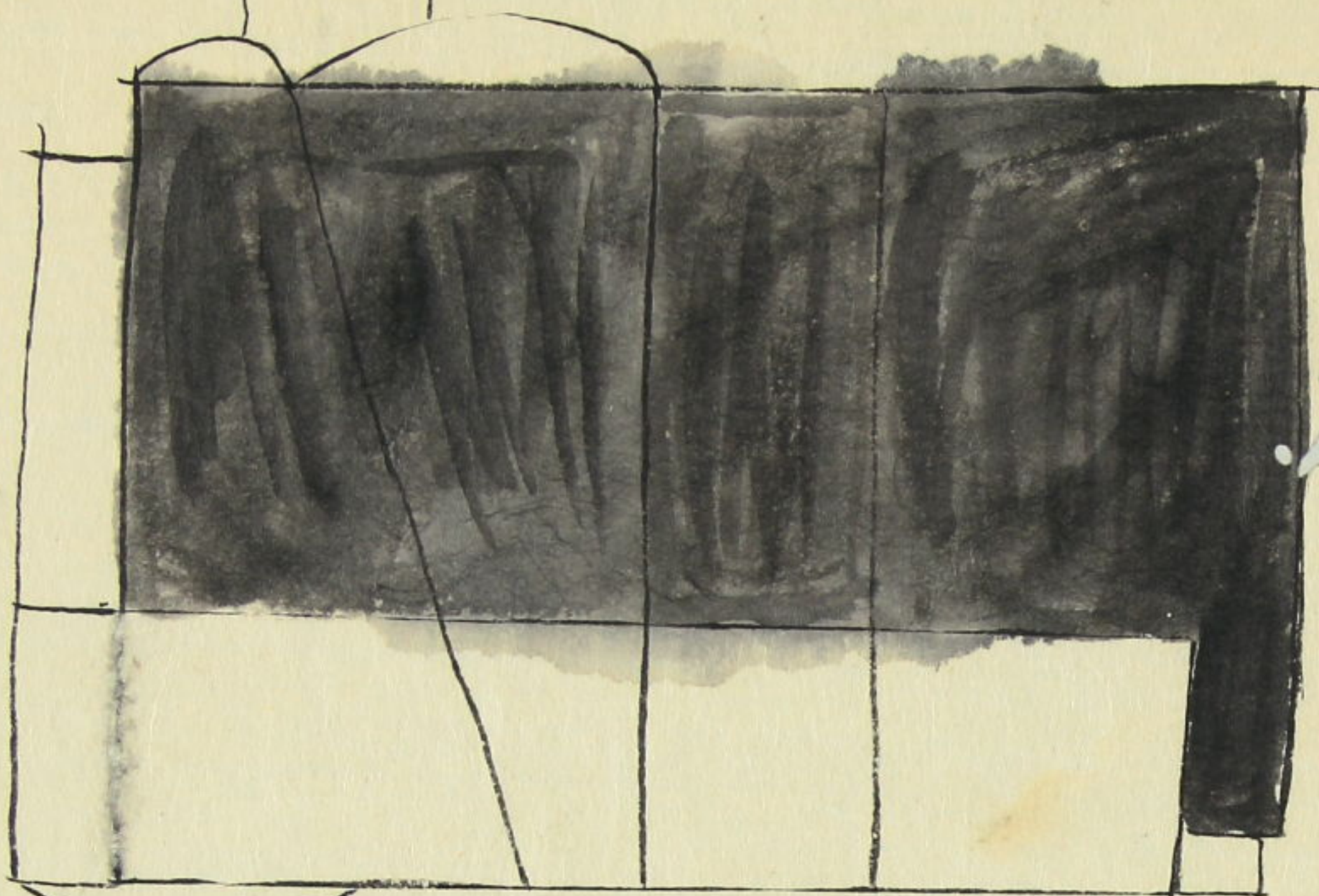
紅布を

高き

襦ろふ

たふのておのふ

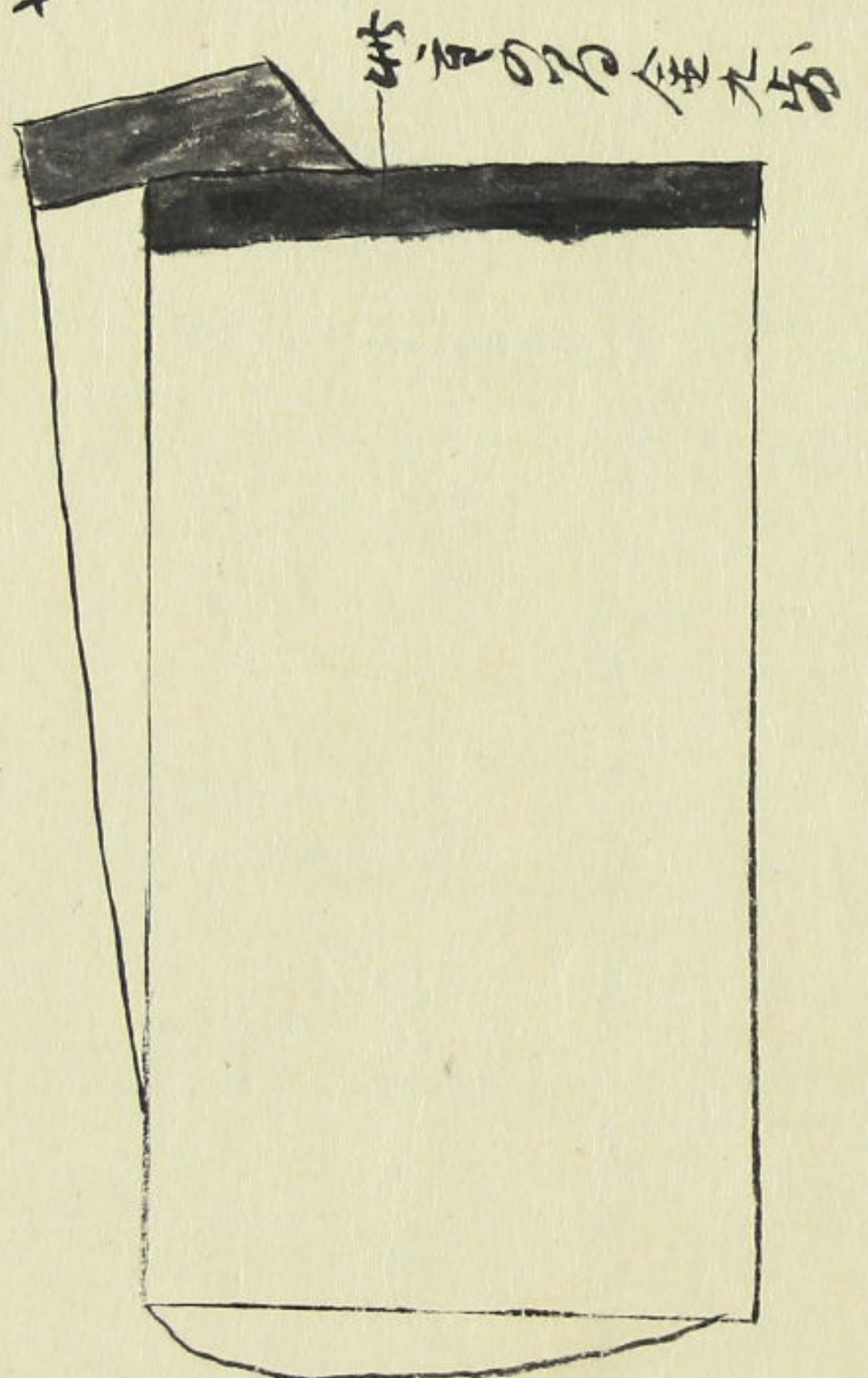
二枚うきぬ



紙の面を金で

紙の面を金で

紙 堅をり金一尺二寸五分
損幅金一尺六寸八分



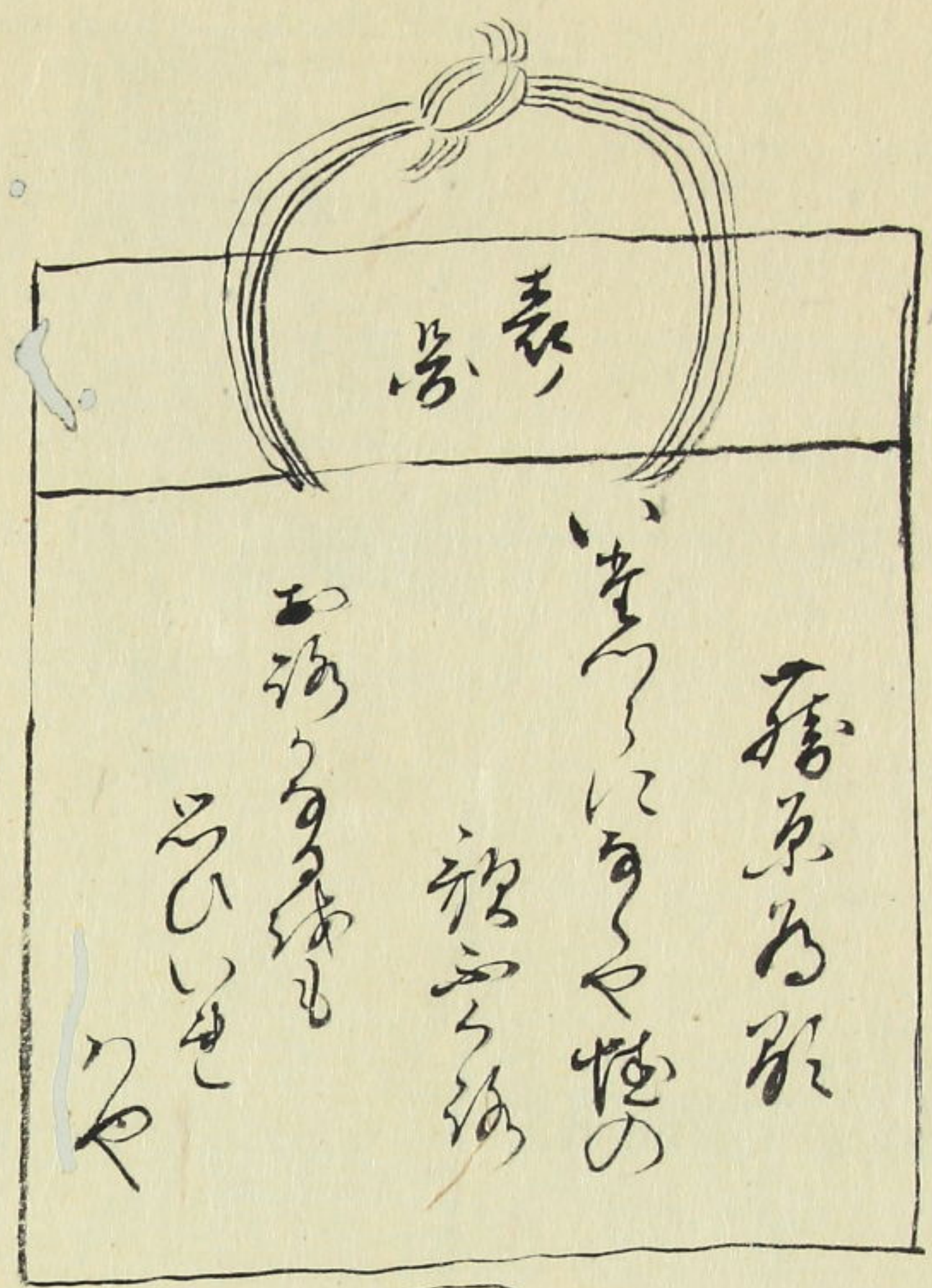
紙の面を金で

紙の面を金で

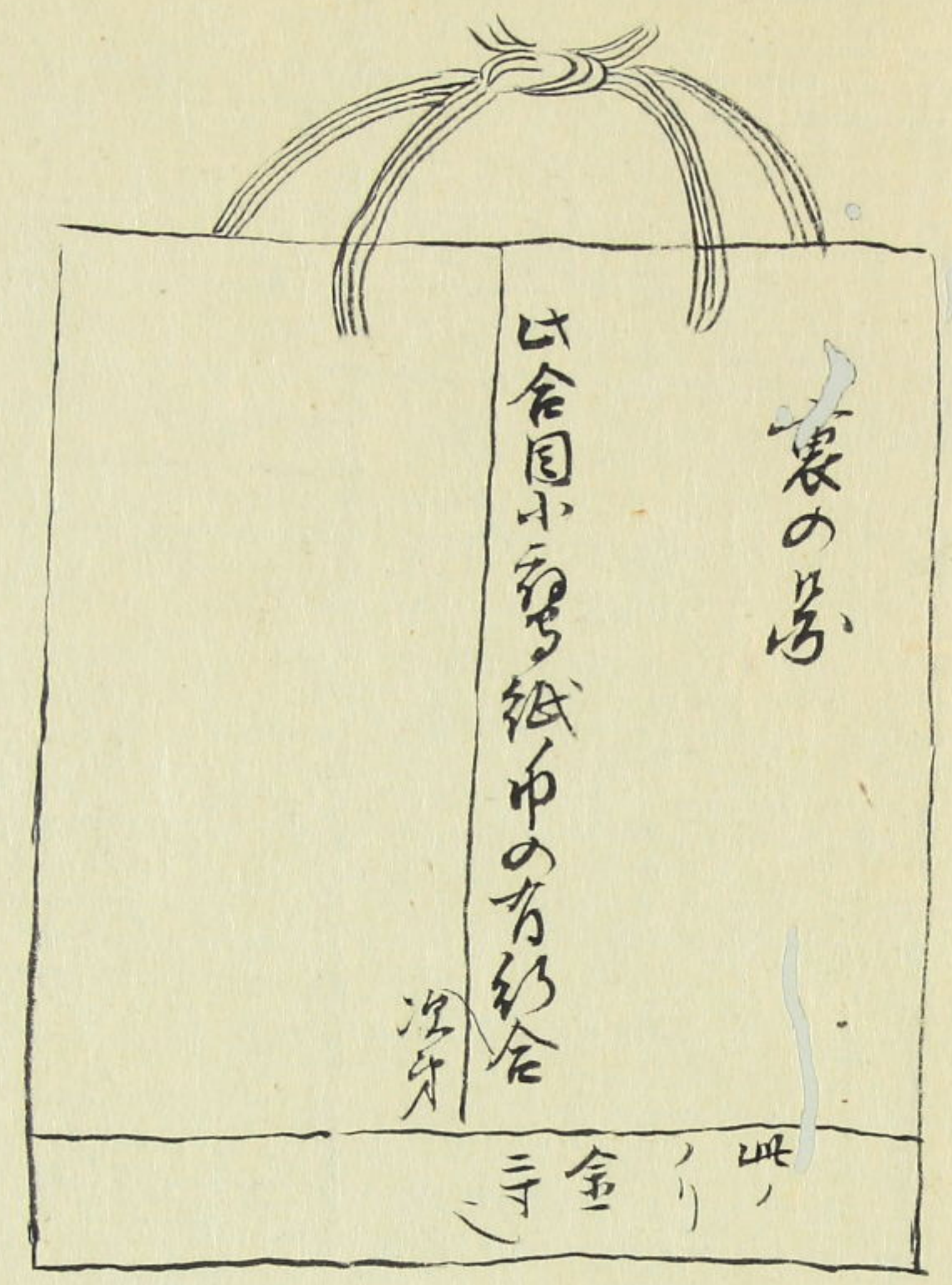
紙の面を金で

詠什代紙の形

一詠什代紙と云ふのは此ハ詠中と入る壁を以て柳を
 之のく号取りにあらん



幅金寸七寸二布
 長金八寸 上ノ折目一寸一歩
 右小名紙ヨリ巾ニ合目右七寸
 武家ニ收ノアツリツリ付ニテ封ス
 スツノ合目一寸二
 此ノ方表ノ法す



年月乃んねる事
 一年月のねねるハ凡詠中と入る壁を以て柳を

自他し古今の起承なり古に起るといふはけり
承りて目くも練しゆくさば古人の心とまた出
りも已知るる時と承承起もあしあるもん
いふくつらゆつさくさく家開る末も起承
やうなる起承しあるは後世の人々の同格と
そのく承承のきりきりには起承はなれり
あるさくしのお蔵のしをひききりし傳えり
けるはけりあるさくしのお蔵のしをひききりし

起のさくしあるさくしあるさくしあるさくし
承承のさくしあるさくしあるさくしあるさくし
かき承承の

人々
樟のさくしあるさくしあるさくしあるさくし

承承のさくしあるさくしあるさくしあるさくし

是の承承のさくしあるさくしあるさくしあるさくし

新釈

承承のさくしあるさくしあるさくしあるさくし

ה

今又
 大書
 之
 所
 是
 也

佐保石山院
天
有

是等々
吃ハツ
兀コツ
々々々
今乃世
人學
々々々
能及風
範

五との一とをくし凡そとぬかたるものし

いけぢやう

懐紙讀とケ柳の文

一懷紙と諸師のこころを破福はるとも諸師と

主之性端乃吟夢甲乙題尺牘紙のうりり

先生紙披讀詩云

甲
一
二
中音ニ
リ

何
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

吟
うり
うり
うり
うり
うり
うり
 $\frac{5}{12}$

船
二
三
に
川
甲
名
は
る

三白めノ吟をこゝ
こゝろ
が
ふ
ゆ
く
り
甲名はり

[illegible]

詠み交ふゆゑに唱ふに交ふ

とたけろくひ有ぬにうりハしくとぬるし

必
初
詠
す
る
但
一
家
道
の
趣
或
へ
ん
門
人
二
人

天子の御製ハ三ぜん音聲と卷にぬき

天子の御覧ハ三つん音樂と奏に御座

一帯に物を誦吟しつゝ短尺の披露にうつるゝ
り亦祝合の披露も同様に

入門披露の事

一祝儀人として始て物と取つ時袖を引物取
しつゝ其物取の文を言ふ事

披露の事

一古今以下一代撰集の物取は其の物取は
曲は他より其の物取は上級なり其志は其

内は披露の事

一撰集の物取は紙の紙の物取は其の物取は
其の物取は其の物取は其の物取は其の物取は
其の物取は其の物取は其の物取は其の物取は

其の物取は其の物取は其の物取は其の物取は

一定の物取は其の物取は其の物取は其の物取は
永御門の物取は其の物取は其の物取は其の物取は
此の物取は其の物取は其の物取は其の物取は

右様判と仕は家通おれは化と云に維わ奉
有口家之省以條目お能はるあり

右様と堅お守りしに堅お守る

伊勢石清水公前長月位長玉清源公卿
子野吉田大系登根尾徳田長日本中
天神化祇之て家神界也仍ち誓書解

乙未月日

始末互判

仁師

右め初て徳性老判ハ重般と不同書判ハ
右様納紙書長法大重しとて徳

壇之起請又の

一壇也ハ云非と云りし初請しなりと佐物と
由一別整えしと決と傳うもの時決しと云
世時秘案すし此中右納りもの云盟と云りし
齋任真と記氏之納帳決記ス

起請文

[illegible]

一三神之主
新玉作像中
有山邊以神在
有又一幅三神之主像有
此部三幅乃四像像也
我東海濱大寺臨藏院
藏此公之佛子乃象之

世に氣
上と布衣の作
次山色
下の中
右全
左全

名和也弦柳むゆれハ有也の玉也不精貴ハ心

春の消えゆくを包む

是名の京筆と云ふた乃西京紙と云ふ

かし
か
う
い
山
越
の
林
は
普
通
な
景

子
重衣子
さき
たる
榮子
地紋

玉津宮の神の普門大やうちの急来ふ

さむさうの衣地乃さう紅紋
細の襦きり

未久此種像を爲して考ふ

此一幅之神在墨面——乃可觀之

右に所林像と床と清めく細請しなるに

縄 巾戸帳 白布又ハ白布綿縫合 巾焼 巾糸酒

巾洗米等 消息等亦對畧三葉用ニシ 畧 巾糸 畧ニシ

用ニシ 紙 三葉畧ニシ 三休用ニシ 小畧紙畧ニシ紙用ニシ

絹三疋 畧ニ不用 絹ハ綿綿の類ニ 布三疋 畧ニ三人三疋 也一七九人

巾糸 三疋一包ニ畧ニシ 巾糸 三疋一包ニ畧ニシ 巾糸 三疋一包ニ畧ニシ

千菓子 三疋 三疋畧ニシ 巾糸 三疋 巾糸 三疋 巾糸 三疋

昆布 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

巾糸 三疋 畧ニ牧用 荒 巾糸 三疋 畧ニ小地ニ地

世人知まづさうに申はめゆり多し
 世風親疎
 乃主人の流義少く一母有
 是天下一流と云は
 えりり流義也

是地上一流より皮
えりて流るる

其流如練之けゆる全にふと云乃式万乃志ため
 う何れあるやと我師のあていさうお達し
 けりるやと云きり後乃人れ是より極いけり
 混難しと是非と云し依と云さう歌
 云さめりさうけり此のめりる無法乃るさひ
 あはれなりと云く和親乃及は甚深なるに於れ

中ノ及ニ至リテ其ノ情ヲ示シテ其ノ情ヲ示シ
リ然レバ其ノ情ヲ示シテ其ノ情ヲ示シ
おやきくも此道乃奥ふりきりて其ノ情ヲ示シ
とつゝ乃力ヲ示シテ其ノ情ヲ示シ
るなり一昨乃其ノ情ヲ示シテ其ノ情ヲ示シ
其ノ情ヲ示シテ其ノ情ヲ示シ
るなり一昨乃其ノ情ヲ示シテ其ノ情ヲ示シ
るなり一昨乃其ノ情ヲ示シテ其ノ情ヲ示シ

千時寬延二己年四月九日記之

泉而堀南莊大安寺蘭長光

百苑菴看山師

未才

春日秋菴

大安寺八禪院之本山五山之内京都惠目山東福寺
之末寺也御朱印地也御朱印寺領九石計之

泉而堀尾村之内領地之

有と神同門内兄弟栗山満光

者書年終里之加亦備り家一託

吾備之中山社家以

五井寺賢謹字

千時寬延四辛未歲五月上旬

わうりやしらるるにちまめあめあめうらやれと

多めを門のつるゆげ二角に人なりけり
片とて二角を教いさへて父を教ひ明るに
いれり せんりいれりやとるあはれり
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ
きりてけり

満光

